にかさい

江戸川区立第二葛西小学校

令和８年７月１日発行

「褒める」　と　「認める」

副校長　横山　友美

いつかの授業中のことです。あるお子さんが学習に取り組む姿に、私は、このように声を掛けました。

「おっ、すごいね。えらいね。」

その子は、普段は授業への参加に前向きではなかったお子さんです。授業中でも、学習用具を自ら準備することはまれで、筆箱の中の鉛筆はたいてい午前中の内に、どこかに遊びに行ってしまいました。その子が、ある１枚のプリントに取り組んでいました。私は嬉しくなり、「褒めよう。」と思って、前述の言葉を掛けました。すると、その子は、私の方を見ずにこう言いました。「すごくない。えらくない。」きっぱりとした、拒否的な言葉でした。

私は衝撃を受けました。日頃、注意を促す言葉掛けが多くなってしまうお子さんでした。頑張っている姿を目にして嬉しく思い、今こそ褒めるときだと思いました。しかし、私の選んだ言葉は、その子の頑張りを認める言葉ではなく、「普段はできていないことを、珍しくしている。」という事実を浮き彫りにする言葉でした。その後、私はその子と話し合いました。その子は、授業中に学習に取り組んでいるのは「すごい」ことや「えらい」ことではなく、「当たり前」のことだと話してくれました。本来「当たり前」のことをやっているのに「すごい」と言われるのは、「嬉しくない」ということなのです。

☆ ☆

「褒める」ことがおおげさになってしまう場面では、「できていること」「今していること」をお子さん本人に伝え、「認める」ことに効果があります。例えば、「静かに本を読んでいるね。」「座っているね。」「話を聞いていたね。」「最後まで取り組んだね。」といった、何気ないことでよいのです。また、学年が上がっていくと、大勢の前で大げさに褒められることを嫌がる子も増えていきます。「できなかったこと」「できたこと」の結果に注目せず、お子さんの存在そのものや、努力の過程を認めることで、心理学でいう心理的安全性の保たれた関係になります。その上で、お子さん自身が「あと少し工夫すると、もっと結果がよくなるかな。」「そのためには、どうすればよいだろう。」と考えられるようになることを後押しします。学校においても、お子さんを認め、お子さんの努力の結果、望んだ成果が出た時には、「努力していたからだね。」「やったね。」と、大いに褒め、共に喜び合うことで、成長を促してまいります。

お知らせ

・図工の宇津野主任教諭の妊娠に伴い、１１月より産休に入ります。産育休の間、家庭科専科の田村教諭が4年生の一部、5･6年生の図工の授業を行います。4年生の一部、5･6年生の家庭科は、中水教諭が行います。

・おおぞら学級１組の大塚教諭は、３月３１日まで病気休職を取得します。代替の教員に関しては、決まり次第ご連絡します。

・事務の福岡は、８月１日より３月３１日まで育休を取得します。育休代替として、野田 政明が勤務します。

大輪のガクアジサイです。
玄関前に咲いています。

7月の暗唱

雨ニモ　マケズ　　宮沢　賢治

雨ニモ　マケズ
風ニモ　マケズ
雪ニモ　夏ノ　暑サニモ　マケヌ
丈夫ナ　カラダヲ　モチ
欲ハ　ナク
決シテ　イカラズ
イツモ　シヅカニ　ワラッテイル

宮沢賢治は、「銀河鉄道の夜」「風の又三郎」「注文の多い料理店」などの童話や詩を書いた人です。

原文はカタカナで書かれています。当時、宮沢賢治が学校で最初に習ったのが、ひらがなではなく、カタカナだったからだそうです。

この詩の続きは、まだありますので、ぜひ調べてみてください。